

山王さんの祭神「^{おおやまくいのかみ}大山咋神」と猿神「^{さんのん}山王さん」について

1. 総本山 日吉大社 滋賀県大津市坂本
全国にある日吉・日枝・山王神社 3,800 社の総本山
2. 祭神 東本宮の祭神 大山咋神（^{おおやまくいのかみ}）
西本宮の祭神 大己貴神（^{おこなむちのかみ}）
3. 大山咋神〔国つ神〕-注1 大年神（^{おおとしのかみ}）の子で、
またの名は山末之大主神（^{やますえのおおぬしのかみ}）である。
「咋」とは「杭」のことであり、大山に杭を打つ神。
山の所有者の神で、地主神である。農耕（治水）を司る神とされ、
五穀豊穰、家内安全、土地守護、子孫繁栄などそのご利益は多彩である。

注-1 国つ神〔国津神・地祇（ちぎ）とも書く〕

神の系統は国つ神と天つ神とがある。天つ神は天照大御神（^{あまてらすおおみかみ}）の命により、孫の邇邇芸命（^{ににぎのみこと}）が三種の神器・〔八咫瓊勾玉（^{やさかにのまがたま}）・八咫鏡（^{やたのかがみ}）・草薙剣（^{くさなぎのつるぎ}）〕と五人の神々を伴い高天原（^{たかまがはら}）に降りて来た、いわゆる天孫降臨である。

この時、高天原に居た神様と天孫降臨以降生まれた神様が天つ神である。

しかし、この国には元来から土地を守護する神々が存在していた。

身近なところでは、地神、水神などがそうである。この神々が国の神であり、代表として大国主命、大山咋神、猿田彦命などがあげられる。この国つ神の総社が出雲国の杵築大社であり、現在の出雲大社である。

4. 大山咋神と最澄

日吉神社の祭神・大山咋神は、『古事記』に「近淡海国（^{ちかつおおみのくに}）の日枝山（^{ひのえやま}）に坐（^{ましま}）す」とあり、もともと比叡山（日枝山）の地主神であった。唐から帰朝した最澄-注2 は、延暦24年（865年）比叡山に天台宗を開き延暦寺を創建した時、琵琶湖岸の大津市坂本にある日吉大社の祭神・大山咋神を比叡山延暦寺の総鎮守、天台宗の護法神と定め、

「日吉山王」と称しあつく尊崇した。神仏習合信仰である。

山王の号は、中国の天台宗・国清寺（^{こくせいじ}）に、地主神として祀られていた「山王彌真君」（^{さんのうげんひつしんくん}）の名に由来している。

注-2 最澄（さいちょう）〔伝教大師〕

日本天台宗の開祖、飛鳥・奈良時代、神護景雲元年（767年）滋賀県近江の生まれ。12歳で出家し14歳で得度して最澄と称し、南都六宗の学を修め比叡山に登り草庵を結びこもる。その後、天台の經典を研鑽し、延暦4年（804年）37歳の時、空海らと唐（中国）に渡り、天台円教、禪、戒、蜜の四宗を修得して、翌年延暦5年（805年）帰朝し、比叡山に天台宗延暦寺を開祖する。弘仁13年（822年）55歳で没する。

※南都六宗 奈良時代、平城京を中心に栄えた仏教の6つの宗派の総称。奈良仏教とも言う。
 ※草庵を結ぶ 粗末な仮小屋を作って住まうこと。

5. 神猿

日吉神社の使いで「神猿」（マサル）と呼ばれている。

マサルは「魔去る」「勝る」に通じ、縁起の良いものとして信仰されている。

「日吉さん」と言えば「お猿さん」と言われるほど、魔除けの神猿さんとして広く知れ渡っている。猿（えん）は縁につながり、縁結びの神でもある。

＜上幸平の山王さん＞

有田町史の通史編に「山王神社の祭り」として次のように紹介されている。

「有田の山王神社のお祭りは、神埼郡仁比山の大御田祭と同じく12年に1回の「さる年」の5月の初申（はつさる）の日に行われる習慣であるが、昭和31年山王祭りは初申の日が陶器市と重なったので5月17日に行われた。

この日のお祭りは午前9時から、上幸平天満宮境内にある山王神社の前で陶業の振興と五穀豊穰を祈る式典の後、御神体を奉戴して中樽区の瀬戸口富右衛門工場前の山王社までを往復した。その間、区民総出の仮装行列などのお供が従い、笛や三味線のにぎやかな音楽に合わせて両区内をねり歩き、天満宮でも舞台を設けて踊りが競演され、両区をあげてにぎわった。

なお、上幸平山王神社の御神体「山王さん（さんのんさん）」はいつの間にか紛失したので、陶芸家松本佩山が仁比山村山王神社の御神体を参考にして、桃の実をかかえた一尺大の猿の白磁像を制作し、同神社の新しい神様として17日奉祀された。」—有田町史—

2区の山王祭趣意書—廉隅氏による—と同じことが書かれているが、いつ頃、どこから分霊されたかについては、記録などもなく不明である。大山咋神が奉られたのは、大山咋神が山の守護神であり、内山での「山」とは「皿山」のことであり、皿山を守る、つまり陶業を守る意義が込められている。また、大山咋神は農耕の神でもあり五穀豊穰が祈願される。五穀（米、麦、粟、豆、稗や黍など）が豊作で、住民が生きる糧に困らないようにと祈願されたのであろう。要約すると、この地区の陶業が繁盛し、生活が安定するようにと先人達はこの神を奉り崇拝したものと推察される。

こうしんとう
 <庚申塔>

上幸平の天満宮の境内に庚申塔が石垣の上に建てられている。江戸時代のものと思われる。この地区の先人が庚申（かのえさる）の年に供養の意味か祈願成就の意味かを込めて建てられたのであろう。また、同じ境内に今は台座のみ残っているが、第一次世界大戦の折、中国青島（チンタオ）攻略の際、戦利品として持ち帰ったドイツ軍の海軍砲も大正9年庚申の年に寄贈されている。（青木家が建立寄贈）

この庚申といえば猿であり、庚申さまの「つかわしめ」の猿といわれる。山王さんと庚申さまには共に猿が「つかわしめ」ということになる。そのため山王神社や庚申堂などにはあの「見ざる、聞かざる、言わざる」の三猿がよく安置されている。これは「人の悪いところを見たり聞いたり言ったりしてはいけないよ。」という、道徳的な教えとされている。

庚申さまは、いろいろな祭神を抱え込んでいるため、ご利益の数も半端ではない。五穀豊穰、商売繁盛、無病息災、招福、長寿、厄除け、夫婦和合、良縁、離縁、就職、学力向上、諸芸向上、家内安全、交通安全・・・など諸事万端、生活全般何でもござれの神様で、特段苦手なものがないという、とんでもない万能の神様である。

※つかわしめ

神仏の使いとされる動物。稲荷（いなり）の狐（きつね）、八幡の鳩、日吉（ひえ）の猿、春日（かすが）の鹿、天満宮の牛などの類。

<天満宮>

天満宮の祭神は菅原道真公であり、学問の神様として有名で農耕の神様でもある。大山咋神と同じご利益を持っている。なぜ農耕の神かと云うと、道真公は別名雷公と呼ばれ、雷神と崇められている。怖い雷も農民にとっては恵みの雨をもたらす天の神でもあり、天満宮を天神さんと呼ぶのは、この様な意味があった。

地名としても数多く残っている。博多の天神通り、有田の天神森、天神元など。水がなくては人は生きてゆくことが出来ない。水は最も身近で最も大切なもので、その水を守ってもらうため天満宮が勧請されたものだろう。水飢饉の時などは、天満宮で雨乞い祈願が行われる。

天満宮の「つかわしめ」は牛だが、これは道真公が乙丑（きのとうし）の生まれで、祭礼が25日に多いのは、道真公が生まれた日と亡くなった日がそれぞれ25日だったことに由来している。

2016年2月